

巻頭言

コミュニケーション方略と学び

Preface:

Communication Strategies and the Power of Learning

塚 田 泰 彦*

Yasuhiko TSUKADA

コミュニケーション概念の教育的射程

言語が「カリキュラムを貫いて」教育全般に重くかかわっていることは従来から認められてきたが、「言語の世紀」と言われた20世紀思想の潮流は今日の激変する時代状況に攪乱されながらもその後着々と教育研究の諸相に浸透してきている。一つの顕在化した現象は、コミュニケーション概念が研究領域を問わず多用されていることで、それぞれの領域の再編や領域を越えた実践の開拓の鍵概念となっている。コミュニケーション概念が拡張され、時代を開拓する装置として洗練されつつあることは確かである。言語教育研究を専門にする筆者にも、たとえば、数学教育の研究者が、言語コミュニケーションが数学の学習の諸相に実質的に深くかかわっている事実を正面から問いかけようとするものの意味とその成果を容易に理解することができる。また教授と学習の相互作用の研究がこの現代のコミュニケーション概念の拡張にかかわって「授業」のポリティックスへと踏み込んでいく論理も受け入れやすい。しかし、こうした今日の教育研究の進展が、学習の成立にかかわるコミュニケーションの生成的側面に集中するあまり、一方で、言語コミュニケーションが文化の生産と伝達に独占的な位置を占めた時代の知的遺産を店晒しのままにしていることも事実である。たとえば、それは、読み書きの現実がインターネット社会の激しい変化に掻き消され、リテラシーをめぐる確たる教育的展望を手に入れられないために、旧来の枠組みのまま政府主導の読書推進運動が「古典」を擁護しつつ展開されていることと裏腹の現象といえる。

※筑波大学大学院人間総合科学研究科

こうした事例が示すように、コミュニケーション概念の拡張によって、目下のところ必ずしもコンセンサスを得られそうな新たな見取り図が我々の前に差し出されているわけではない。現状は、その下図を一人ひとりの研究者や実践家が手持ちの道具でなんとか描こうと試みている段階である。

言語教育研究の領域でそうした下図を描きあぐねている筆者が最近体験したことを一つ取り上げたい。

言語系カリキュラムの探求

同僚に誘われて東京都品川区のカリキュラム改革に2年間参加した。昨年度で一区切りとなったこの研究は、同じ地区の小学校2校と中学校1校が一体となって小中一貫の新しい学校カリキュラムを開発しようというもので、既存の教科を言語系（国語・英語）、社会教養系、自然系（数学・理科）、芸術系（音楽・美術）、健康系（体育・保健）の5つに再編し、それぞれの「系の授業」を追究するものである。筆者は言語系の授業の開発にかかわった。当初の計画はともかくも、実際には国語も英語も教科としては存続したまま特定の時間数を別途「系の授業」にあてることになっていた。このため、これらの既存の授業との差別化をはかる必要があり、言語系は国語でも英語でもない新しい「言語の授業」を開発しなければならなかった。参加しているのは小中の国語・英語の教員10人で、筆者は国語教育が専門である。全員が、自分たちがこれまでもっていた専科意識を一方でより鮮明にしながら、しかしこれを明確に否定した新たな授業内容を小中一貫で開拓しなければならなかった。呻吟の末に、視野に入ってきたことを紹介したい。

言語系の授業が国語でも英語でもない「言語力」に焦点化するときには視野に入ってきたものは、うなずきやアイコンタクトといった、近年「コミュニケーション方略」に含めて考えられるようになった言語コミュニケーションの周縁にある非言語的コミュニケーションの諸要素であった。言語系の授業は、言語で言語を学ぶという二重カリキュラムを特質としており、この複合的な事態に絡め取られて、これまで非言語的コミュニケーションにまで気が回らなかった。それだけに今回のような新奇な研究課題にとっては、逆にアイコンタクトといったコミュニケーション方略こそが斬新な「言語系の授業」の指導事項として浮かび上がった。実は、このコミュニケーション方略の偏狭さが思わぬ変貌を遂げて、言語

コミュニケーションにおけるその周縁性の真価を発揮することになる。

うなずきやアイコンタクトなどが文化習慣の違いとしてこれまで度々取り上げられてきており、日本人が相手の目をしっかりと見つめて話すことが苦手であることはよく知られている。学習者にとっても指導者にとっても困難なこの学習課題を正面に据えたとき、外国語教育と母語教育の境界での新たな学びが拓かれることになった。言語系の授業を貫く指導事項としてこのコミュニケーション方略をコミュニケーションスキルの中心に置くことで、これが授業の潜在的な基本構造を刺激し、既存の国語や英語の授業を、引いてはすべての授業の基盤を豊かにし、学びの構えや意欲の向上に貢献することが次第に明らかになってきた。この新たな基点「コミュニケーション方略」を授業開発の中心動機に適切に位置づけた言語系教員の力量にも感心したが、同時に、このコミュニケーション方略が想像をはるかに越える教育シーンの開拓者となりそうな予感がした。

新たな関係性を求めて

この言語系のアイコンタクトの実践を振り返ってみると、慣習的な認識に絡め取られている者がそれを相対化し、その文化差を穿つ視点に立つことのむずかしさを改めて思い知らされる。しかし同時に、それが真摯に追究されたときに新しい世界が開かれることも事実である。現在では、言語や文化の相対主義は自明のこととされ、逆にそれが安易な絶対化につながる場合が多いだけに、文化における周縁性とその豊穡な解釈が奨励された先の時代意識を引き続き共有することの重要性を再認識させられた。上に述べた筆者の体験談もその一つであるが、「教科の神話の解体と再構築」という近年の改革動向においても、教科の相対化にストップがかかるどころかむしろ不用意な事態を引き摺ったままことは進行しているのではないと思われる。たとえば、国語科はここ四半世紀「文学教育の危機」に打ちのめされ、一方で国語科のアイデンティティである「言語の教育としての立場」の脆弱さを一向に解消できないまま、激しいメディア状況の変化によって「言語コミュニケーションの基盤」それ自体まで揺さぶられている。こうした事態から国語科を切り離してしまい、まるでなにも変化など起きていないかのように「国語」はすべての教科の基盤、すべての学習の基礎と唱えてみても、漢字の学習や音読といった表層的な学習が焦点化されるだけである。この現実を快く思わない筆者には、「コミュニケーション方略」が、言語研究のこの半世紀に及ぶ飛躍的

な発展の影で長く周縁的な位置に甘んじながら、近年、劇的なコミュニケーション概念の拡張の中で意外な権力を回復しつつあることが興味深い。

コミュニケーション方略は、あらゆる談話（ディスコース）の主導権を維持したりあるいは取り替えたりする権能を含むところが重要で、「自分がうなずかなかったために相手が一瞬沈黙したのに乗じて、こちらから話し始めてしまうこと」や「母語話者からの問いかけに語彙も文法も不足していて返答に窮したときは、平然と自分の知っている単語で話題を変えてしまうこと」もできる。こうした意図的な戦略の行使に限らない場合も含めて、コミュニケーション方略が、陰に陽に言語コミュニケーションを豊かにし、さらにその境界を越えてコミュニケーション状況を管理するその一連のミクロなポリティックスに、いま研究者の注目が集まっている。

今後、この研究の成果がどのような教育の現実の刷新に及ぶかは定めがたいが、授業におけるコミュニケーション方略の最近の質的研究を概観すると、学習者が授業システムでの新たな関係性を構築するためにこの方略にどうかかわるかが決定的に重要であることが明らかにされている。コミュニケーション方略は学習者の側から学びの文脈を改革する切り札とみられ、この視点から教授と学習の諸相を追究することが、授業の本質から学びの再構築を促すことになるのではないかと期待されている。